あとがき

編集委員　樋口 利彦

最近、私は毎年の学会大会で発表されている環境教育の実践がなぜ論文になり難いのかを考えるようになった。それは教育実践と密接に関連した文献に発表者が遭遇していないからと予想している。一般に、学会誌が他の雑誌と異なる点の一つは引用文献にある。なぜ引用文献が必要なのだろうか。それは論文で主張されている事柄の正確性や信頼性を裏付けるものと誰でも述べるであろう。私もそう思うが、引用文献についてもう少し本質的なことに迫ってみたい。

少し具体的な実践をもとに話しをはじめよう。自然観察により学習者が自然に興味をもち、自然の構造や機能を率先して観察するようになり、他の人にそうした楽しみと自然保全の重要性を普及するようになった場面を考えてみよう。環境教育の実践者はこれに似た現象を経験されたことがあると思うが、そうした事例も原著論文として発展する可能性を持っているのである。このようによく見られる実践の場面でも、「自然のどこに興味を持ったのか、どのようなプログラムが有効であったのか」「主体的行動は何によってもたらされたのか」「観察活動を通して育成される土地への愛着は環境行動に結びつくのであろうか」「自然観察は環境行動にどのように寄与するのか」「専門家の側面をもつ市民の育成はどのように進展するのか」「自然保護の考えの対立は学習過程で存在しなかったか」など、環境教育にとって探求されるべき重要な事柄が、環境教育実践指導者の中に芽生えてくる。これらの一つをテーマに文章としてまとめてみようと一念発起すれば、文献を検索しなければならない。興味深い文献、自分の問題意識と似た論文を見つけることができれば、論文検索の作業が楽しくなる。もし日本の雑誌や書物に関連した文献が見つからなければ、海外の書物や雑誌にあたってほしい。世界に目を向ければ、自分の問題意識と関連したことは意外と研究されていることに気付く。文献は上記の疑問に答えをもっているかもしれないが、多くはまだ未解決な場合が多く、私達の疑問に直接応えてくれる正解はあまりない。正解があれば自分が作成しようとする論文のオリジナリティーは失われることを意味するわけで、正解が見つからない方が探求心は持続する。また、文献を読めば読むほど、探求心が増幅され、仮説が生まれる。しかも、同じ問題意識を持つ研究者が他にもいることに心強く感じる。ここまで到達すればもうしめたものである。その時点で、論文の構成は出来上がっていよう。

文献を読むことはアイディアの源でもある。実践や調査が一つの車輪であるなら、文献はもう一つの車輪でもある。実践や調査によって事実を蓄積し、そしてそうした事実を一つの物語として構成し、探求していくのに不可欠なのが文献である（実践や調査もアイディアの源泉であるが、この議論は別の機会にしたい）。文献を読んでいくと新たな視点や仮説が出てくる。自分の実践に対して深みのある解析が可能となっていく。結果として、文献は尊敬されながら論文に引用されるのである。環境教育の実践を論文としてまとめることで、自分の実践を冷静に振返ることができ、実践に対する改善策や方向が見えてくるのではないだろうか。それは学術的な活動と教育実践が結びつく瞬間でもある。教育実践が論文としてレベルアップしていけば、日本の環境教育の実践も向上すると思えてならない。編集委員の一人としてまた環境教育の実践者の一人として、多くの教育現場の活動が論文として継承されることを願っている。